

兩度に過半金澤へ返され、又瀕死にして湯藥を自ら斷ちて服せざる事など、皆照應す。又公の遺囑にてもあるか、高岡城の殿閣も公薨後速に廢せられ、金澤へ諸士も早く引取らせらるゝ意味、併察すべし。といへり。懷惠夜話に云ふ。瑞龍公は守成の御功者無類也。太閤他界の後、天下の者目を付けたるは、徳川家と前田家也。然るに慶長四年高德公逝去の後、既に石田逆亂の催あり。歸國して休息し給へとあるに同心せられ、早速歸國し給ふ。夫れ故人皆肥前公には天下の望無之と申しならしたり。是ははや徳川内府と弓矢の位を知召し、専ら守城に御心有るゆゑなり。關原の時も、北國の事は伐取次第にと徳川家より申來るといへども、大聖寺切にて頓て歸陣し給ひ、大坂陣可起前年、秀頼公より頼思召の由仰下さるゝ處、太閤御取立の身なれば畏入りたり。利光事は内府縁者なれば所存難計との御請にて、さて御身附の諸士の内宜しき者共は、皆々金澤へ返し給ひ、御自身は毒を召上られて遂に薨去し給ふ。といへり。今按ずるに、駿府政事録に、慶長十九年五月廿五日。自加賀國飛脚到來。去廿日中納言利長逝去之由慶五今日申來云々。

在府之諸候麾下多士。爲追悼利長悉登城。とありて、同年七月廿六日の條に、秀頼被仰云々。仰曰。今度大佛供養之儀。棟札云。鐘銘云奈何之由。御氣色不快云々。と、大佛の鐘銘に、國家安康とある文言を察當せられ、大坂戰爭の發端となりしも、吾が藩主利長卿の他界し給ひしゆゑなるべし。此の頃的情實誠におもひやられけり。乍去慶長五年以來加賀能登・越中三ヶ國を全領して、明治二年十四世從三位慶寧卿封土奉還まで、凡二百七十年天下の雄藩と仰がれ、朝廷に於ても清華家に准ぜられしは、實に利長卿の守成に尊慮を止め、死を輕んじ後榮を重んじ給ひし故なりといふべし。

○今枝内記邸跡

此の邸地は、今枝氏元祖内記重直、慶長年中高岡養老附の諸士金澤へ搬宅の時賜はり、夫れより代々居住すと云へり。家譜に、慶長十八年。瑞龍院殿令重直奉仕微妙院殿云々。各反金澤。重直其列也。とあれど、三州志には、十七年養老附三十九員減却、金澤へ返さる。其の人名、五千石前田美作・八千石松平伯耆・九千石神尾主殿・八千石三十

富田下總六千石今枝内記云々。とあり。頭註に、菅家見聞集に、三十九員被返。係十六年。不是。とあり。さて、今枝氏は代々爰に居住せしかど、明治廢藩の際家屋を毀ち地所を賣却し、今は畠地と成りたり。

○今枝内記重直傳

家譜を按ずるに、今枝氏は土岐今峰の末裔にて、其の祖先美濃國今枝郷に土著せしを以て、今枝を稱號とす。内記重直の父は八郎左衛門と稱し、美濃國にて内藤伊賀守に仕へ、六千石餘を領知す。後齋藤道三に仕へ、頗る軍功ありて、感狀數通を家藏す。重直は初彌八と稱し、織田信長公元龜元年六月江州姊川合戦の日、稻葉伊豫守が手に屬し、崩際に於て首級を獲。于時十七歳。翌二年五月信長公伊勢長嶋の一揆を討たれし時、伊賀伊賀守の手に屬し、賊を掃ひ高名す。其の後織田信雄公に仕へたり。天正十二年三月尾州小牧山合戦の時、鎗を合はす事一日兩度。此の後秀吉公に仕へ、天正十九年より關白秀次公へ屬せられ、追々加恩ありて、文祿二年尾州海東郡等にて四千三百石を領知し、翌三年秀次公の諸士、各姓を賜ひ官位に叙任せし時、

重直は從五位下に叙し内記を拜任せり。秀次公不慮の事あるに依つて、暫く浪遊せしが、幾程なく利長卿の佃招により北國へ下り、越中森山に於て利長卿に奉仕し、堪忍料三千石を賜はり、追々加恩ありて六千石を領知す。慶長十八年より利常卿に奉仕し、大坂兩度の軍役に隨從し、元和五年六十六歳を以て致仕し、剃髮して名を宗二と稱す。この時家祿七千石を養子直恒に譲り、重直は五百石を菟裘料とす。一日利常卿宗二の隱栖に入駕し給ひしに、茶湯を以て奉饗せり。利常卿其の前日西尾隼人を以て、俊成卿五首の和歌の掛軸並に芦屋の釜を宗二に賜へり。宗二、秋廣の脇指を以て隼人へ引出物とす。寛永四年十二月廿三日卒す。享年七十四。宗二の肖像に石川丈山記して云ふ。宗二居士者、世爲濃州人。姓豊臣。氏今枝。諱重直。本名彌八郎。號内記云々。其爲人也。節儉篤實。不誇功勳。不惰忠勤。好咏後歌。兼嗜茗飲。澹然自逸。卒於私第云々。また寛文六年木下貞幹が撰述せし墓碑の記にも詳傳を載せたり。又拾葉名言記に、利常卿家督を繼ぎ給ふ後、津田道供・今枝宗二等御咄の衆なりしよし記載す。家譜に云ふ。宗二居常好。